

J **apanese text**

2016年 秋/冬号 日本語編

浮世絵

江戸時代の“ポップアート”
時代を超える「浮世絵」の魅力

撮影=西山 航 (p.27、31、35)、大見謝星斗 (p.34)
 塗り絵作製= VERSO
 文=清水千佳子 (p.31-33、p.35 コラム)、編集部
 協力= 白坂ゆり (p.16-25、34-35 美術館)、賀来潤恵 (p.27-30)

p.016

江戸時代の「ファッション写真」や「プロマイド」、「旅行ガイド」として、時代の空気や人々の日常を写し取った「浮世絵」。その魅力に迫るとともに、現代の新たな取り組みを紹介しよう。付録の塗り絵では、浮世絵の名作たちをあなた流に解釈して楽しんでほしい。

喜多川歌麿《当時三美人 富本豊ひな 難波屋きた 高しまひさ》

1793年 千葉市美術館
 「寛政の三美人」と呼ばれた、上が吉原の人気芸者「豊雛」、右手に浅草の茶屋の娘「おきた」（当時16歳）、左が両国の煎餅屋・高島屋の娘「おひさ」（17歳頃）。歌麿は下ぶくれのうりざね顔（瓜の種のような、色白でやや長い顔だち）に、鼻筋の特徴、目や口もとの表情をちよつと加えることで、それぞれの個性を表している。

東洲斎写楽《八代目森田勘弥の駕籠昇鷲の次郎作》

1794年 山種美術館
 江戸時代の有名な歌舞伎小屋のひとつ、森田座。その座元・八代目勘弥による、1794年の「敵討乗合話」的一幕。袖を胸の前に揃えて見得を切る仕草を的確にとらえた、動きのある大首絵（浮世絵の様式の一つ。半身絵）。

浮世絵界の綺羅星「美人画」
——流行を写す「ファッション写真」

文=林 綾野

p.018

1603年、徳川家康が江戸幕府を開き、260年にわたる天下太平の世が始まりました。ゆとりある時代の中で、庶民たちの文化も鮮やかに花開きます。当時の世相や風俗、流行を描き表す「浮世絵」は、今でいう新聞や雑誌、広告のようなものでした。

肉筆画と木版画が作られましたが、一度に複数枚刷ることのできる木版画によって、広く庶民に親しまれるようになりました。摺りの技法も、墨一色のものから、赤色を用いたものが現れ次第に色数が増えていきます。そして多色摺りの「錦絵」が誕生します。

そんな浮世絵の中でも、美人画はとりわけ人気の高いジャンルでした。「錦絵」の発達とともに女性を描く様式も華麗に変化していきます。流行のファッション、メイク、ヘアスタイルを織り交ぜながら、そのときどきの「理想とする美人像」が綺羅星のごとく描き出されていきました。

江戸美人の原点は、菱川師宣が描く「見返り美人」に見られるおおらかな女性像。その後、初期浮世絵師を代表する鈴木春信が、次なる美人像を描き表します。細い目に華奢な身体、少女のような清純さをまとうその姿に江戸の人々は虜になりました。続く鳥居清長は、そんな女性たちを現代のモデルのようにすらすらと涼やかに塗り替え、清廉なる江戸美人像を確立します。

江戸時代も中盤になり、いよいよ喜多川歌麿が現れます。「うりざね顔」というスタイルを保持しながらも、チャームポイントとしての個性を添えた麗しの江戸美人が誕生します。遊女から一般の女性までをも、きものや小物など流行のアイテムとともに描き、江戸中の人気をさらったのでした。

そして幕末に向かうにつれ、歌川国芳が描く快活で元気いっぱいな美人像など、時代の多様性に並行して女性像の幅もぐっと広がります。昔の雑誌などにかつての流行を見る

のと同じく、浮世絵に描かれた美人たちも、その時分にいったい何が流行っていたのかをいきいきと今に伝えてくれるのです。

鈴木春信 えんさきびじんず 《**緑先美人図**》
できすいけん

18世紀 摘水軒記念文化振興財団

春の庭先に咲く山吹の花。きもの裾からのぞく素足に夜風がまだ冷たいのか、衿に顎をうずめ、たたずむ女性の姿ははかなげ。障子には宴を楽しむ人の影が映し出され、縁先の静けさが際立つ。春信が描く可憐な美人は少女のように華奢で、細めた目の表情もあどけない。

鳥居清長 おおかわぼた 《**大川端樓上の月見**》

1784～87年頃 太田記念美術館

隅田川の西にある料理屋で、すらりと八頭身の美人たちがおしゃべりを楽しみながら月見の宴の準備に勤しんでいる。香をたきしめ、虫かごを吊るし、三味線に糸を張る姿など、清長は女性らしい仕草をしなやかに描き出す。両国橋と町並みを描いた背景にも、江戸の人々は親しみを憶えたことだろう。

歌川国芳 さんかいめだいていずえ 《**山海愛度図会 七 ヲゝいたい**》 えつちうりめりかわおおだこ 《**越中滑川大蛸**》

半身像の美人とともに、コマ絵に全国の名産を添えて紹介するシリーズの一つ。富山県滑川の名物である蛸に見立ててか、まるで吸いつくように爪を立て女性にしがみつくと。 「お痛い」と体を反らしつつも、愛猫を抱きとめるその顔から笑みがこぼれる。

の姿を描き始めます。当時は、役柄になりきる姿を、筋肉を誇張して瓢箪のようにくびれた手足や極端に抑揚をつけた線で描くスタイルが主流でした。

1770年頃になると、勝川春章らが役者似顔絵を描きはじめます。最良の役者その人が描かれた、まさしくプロマイドにファンたちは心躍らせました。役者の顔に注目した大首絵が評判を呼ぶようになると、歌川豊国などの絵師たちは、似顔絵でありながらも、役者をさらに凛々しく理想化されたプロマイドを描き出し、役者絵ブームは加速。一方で、東洲斎写楽のような奇才が生まれます。写楽は1794年、江戸の五月興行に取材した役者絵28図でデビュー。しかし、わずか10か月で制作を打ち切ります。大きな鼻や小さな目もそのままに、役者を美化することなく描き出す手法は、当時としてはまったくのアヴァンギャルド。この極端にデフォルメされた大首絵は、ファンだけでなく役者からも歓迎されませんでした。写楽が評価されるようになったのは現代になってからです。

プロマイドとしての役割を中心に、芝居の場面や複数の役者を群像として表すもの、春章や国貞などによる舞台裏、楽屋裏の様子を描くものまで役者絵は多様さを極め、美人画と並ぶ浮世絵の主要ジャンルとなりました。江戸一番のエンターテインメントだった歌舞伎。ファンたちの熱狂があったからこそ魅力たっぷりな役者絵が数多く生まれたのでしょう。

「役者絵」
——心ときめくスターの「プロマイド」

文＝林綾野

p.020

「美人画」とともに根強い人気を誇った「役者絵」。アイドル的存在だった歌舞伎役者たちを鮮やかに描いた役者絵を江戸の人々は競って買い求めます。浮世絵師たちも腕をふるい、個性豊かな役者絵が数多く生まれました。

歌舞伎は、1700年頃に江戸と上方（現在の関西地方）とで発展。時同じくして、鳥居派の絵師、清信、清倍が、荒々しく豪快な演技を得意とする二代目市川團十郎など名優たち

歌川国貞 《**大坂道頓堀芝居楽屋ノ図**》

1821,22年 Museum of Fine Arts, Boston.
William Sturgis Bigelow Collection, 11.43384a-c
Photograph ©Museum of Fine Arts, Boston

舞台裏も覗きたい、歌舞伎ファンのそんな思いに応え、国貞は楽屋図を度々描いた。江戸の役者が大坂を訪れたことを機に描かれた本図には、右下に五代目松本幸四郎、中央に七代目片岡仁左衛門など東西の名優が揃う。

※歌川国芳《山海愛度図会 七 ヲゝいたい 越中滑川大蛸》(p.18)とともに、9月10日～12月11日名古屋ボストン美術館で開催の『ボストン美術館所蔵 俺たちの国芳 わたしの国貞』にて展示。

www.nagoya-boston.or.jp

林綾野 (はやし・あやの)

フリーのキュレーターとして展覧会の制作、企画に携わる。アトラライターとして美術書の執筆も行う。美術との新しい出会いを提案するため、画家の人生や食の趣向などを探求、紹介している。『ゴッホ 旅とレシピ』、『浮世絵に見る 江戸の食卓』など著書多数。近年企画した展覧会に「安野光雅展」ほか。

写真＝永野雅子

「名所絵」 —旅心をそそる「旅行ガイド」

解説＝大久保純一（国立歴史民俗博物館 教授）

p.022

十返舎一九が書いたコミカルな小説『東海道中膝栗毛』がヒットしたように、江戸後期は旅ブームであった。そうした状況の中、葛飾北斎が1830年頃、各地から望む富士山の景観を描いた浮世絵「富嶽三十六景」を刊行、続いて歌川広重が両国や高輪を題材にした「東都名所」を刊行した。さらに1833年頃から、広重の「東海道五拾三次」が満を持して刊行され、これが浮世絵史上最大のヒット作の一つとなる。

それまで美人画や役者絵と比べて傍流とされていた名所絵（風景画）が、こうした名作の登場や時流ともあいまって、浮世絵の重要なジャンルとして確立されるようになった。しかも名所絵は、流行り廃りの激しい美人画や役者絵に比べ、より持続的に売れたと思われる。江戸を描いた名所絵は、地方から江戸に出てきた武士が故郷への土産とし、東海道を描いた名所絵は、江戸に住む人々の旅への憧れを掻き立ててやまなかった。各土地の食の名物も描き込まれ、現代でいう旅行ガイドのようですらある。一枚で買う庶民もいれば、まとめ買いする富裕層もいたようで、今の豪華画集にも似たセットは、当時の贅沢品禁止令の目をかいくぐって、店の奥で買い求められたと思われる。

空間のリアルな描写の天才

広重の絵は北斎よりも実際の景色に近く、商品の包み紙に

「真景」という言葉を使うほど、広重本人もリアリティを自負していた。高い写実性ゆえに、幕府の行列に同行してスケッチを描きためていたに違いないと思われていたほどである。確かに江戸に近い、今の神奈川あたりの図では現地での体験を感じさせるが、京都に近づく後半以降は、1797年に出版された名所案内記『東海道名所図会』の挿絵から借用した図が散見され、京都までは行ってないだろうという意見が、現在では多数派である。

とはいえ現地を見て描かなければいけないというのは、交通手段が発達した現代の感覚。広重は色彩や線による遠近法を駆使し、また天性の空間構築力を遺憾なく発揮して、元絵を超えるリアリティを生み出している。従来の名所絵を見慣れていた人たちがこの名所絵を目にしたとき、瑞々しい色彩ともあいまって、さながらアナログテレビで見ていた景色をハイビジョンや4Kで鮮やかに見るような衝撃を受けたに違いない。色彩による季節感、クスリと笑える人物の表現なども含め、広重の風景画の旅は見所が満載だ。

「変わり図」と見比べる

木版によって浮世絵の大量生産が可能になったとはいえ、一度にまとまって摺るのは、おおよそ200枚程度とされていた。今でいう初刷を意味する「初摺り」と呼ばれるのは、早い時期に摺られたもののことである。

その後、売れ行きに応じて版元が増刷するが、その過程で、色やぼかしが変わることがあり、これを「後摺り（のちずり、または、あとずり）」と呼ぶ。これは製作工程を簡略化するために行われる場合や、絵師自身の指示による場合もあったという。さらには、長年にわたり摺り続けられる間に、元となる版木が焼亡・摩耗するなどして、版木を彫り直したものを「異版」という。この彫り直しの際に図の一部が変更されることがあり、これを特に「変わり図」と呼ぶ。

例えば東海道五拾三次の「蒲原」の後摺り（p.25）では、夜空の白と黒が反転しているが、これは広重自身が試行錯誤し、関与した可能性が感じられる。また、「戸塚」の変わり図では、旅人が馬を降りる姿が、馬に乗る姿に変わっている（p.22、23）。東海道のスタートとして夜明けの江戸の町を描

いた「日本橋」は、変わり図では人の数が増えている。おそらく版元が、繁華な江戸の中心の象徴として大衆にアピールしたかったのではないかと想像できる。

山種美術館 (p.34) で9月29日まで開催されている『浮世絵 六大絵師の競演』展では、東海道五拾三次の数ある版の中でも最初期に摺られ、傑作との呼び声が高い保永堂版の「東海道五拾三次」を、題字も合わせて56枚一挙に公開。初摺りを豊富に含んだ世界有数のコレクションを見逃す手はない。

歌川広重《保永堂版 東海道五拾三次之内 戸塚・元町別道》

1833, 34年頃 山種美術館

茶屋の軒先の向こうに、東海道の景色が見える。馬からひらりと飛び降りる旅人。馬を中心に顔の見えない男2人、顔の見える女2人を左右対称に描き、向かって右奥に老人を置くことで人物の配置に工夫を凝らしたようにも思われる。

〈変わり図〉

歌川広重《保永堂版 東海道五拾三次之内 戸塚・元町別道》

1834, 35年頃 サントリー美術館

版下絵から変更した例。茶店の窓が閉まり、旅人が馬に乗る姿に変わっている。「動作が不自然だと思われて変更したのかもしれませんがね」と大久保さん。

(p.024)

歌川広重《保永堂版 東海道五拾三次之内 蒲原・夜之雪》

1833, 1834年頃 山種美術館

画面左下の崖の部分および右下の広い部分に注目。紙の地の白の上にごく薄く墨のぼかしを重ね摺ることによって積もった雪を表し、半ば余白のように、宿場の家々と山路を往来する人々を引き立たせている。画面を横切る傾斜した山道が構図の基軸となり、画面左手の宿場町の家並みで透視図法的な奥行きが表現されている。

〈後摺り〉

歌川広重《保永堂版 東海道五拾三次之内 蒲原・夜之雪》

1833, 1834年頃 サントリー美術館

秀逸なモノクローム表現。初摺りから空の白と黒を反転させ、夜の雰囲気を出している。「絵師は初摺りにしか立ち会わないという通説もありますが、かならずしもそうとはいきえず、この摺りの変更には広重が関与していた可能性がある」と大久保さん。

おおく ぼしらいち
大久保純一

美術史家。東京国立博物館研究員などを経て現在、国立歴史民俗博物館の研究部教授。主に浮世絵、なかでも江戸後期の風景表現を研究。著書に『カラー版 浮世絵』、『広重と浮世絵風景画』ほか。

浮世絵版画ができるまで

p.026

協力：アダチ版画研究所

彫師と摺師をかかえる工房兼版元。江戸時代の浮世絵版画をもとに版木を彫り直して復刻版を作成するほか、現代の絵師とのコラボレーションも行い、伝統的な木版技術を今に継いでいる。

www.adachi-hanga.com

(写真)

葛飾北斎《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》

(26.4 × 38.6 cm) 1万3000円

1. 版元

版元は今でいう出版社であり総合プロデューサー。どのような絵を企画し、どの絵師に依頼し、どのような仕立てで販売するか、すべてを管理していた。例えばその鑑識眼で有名な版元の蔦屋重三郎は、喜多川歌麿の才能をいち早く見出して育て上げ、また東洲斎写楽の鮮烈なデビューをプロデュースしている。

2. 絵師

版元の依頼に沿って、まず絵師が版下絵と呼ばれる元絵(写真)を描く。この元絵は基本的に墨一色。彫師が主版を彫り上げた後に、絵師は改めて色指定を行った。最後の見本摺りにも立ち会い、版元とともに最終確認を行う。木版画の下絵は通常の絵画と違い、限られた版数の中でいかに魅力的に見せるかという省略の美が根底にある。

3. 彫師

山桜の木に、裏返しにした下絵をはりつけ、小刀や鑿などの道具を使い分けながら彫っていく。主版と呼ばれる版木

(写真)を彫り終わると、今度は色ごとの版「色版」を彫る。髪の毛一本一本など細部の彫りは、彫師のセンスと力量に大きく左右され、北斎は版元に彫師の指名をするほどこだわりがあったという。

4. 摺師

紙の伸縮具合や版木の状態、その日の湿度などによって絵の具を調整し、和紙に摺り込んでいく。絵によって摺る回数が異なり、例えば「神奈川沖浪裏」は8回摺りで完成。墨の主版→摺り面積の小さい色版→大きい面積の色版の順に、薄い色から摺るのが一般的。高度な技術を必要とするぼかしは、摺師の腕のみせどころ。摺り体験ができる施設もあるので、ぜひ体験してみてください (p.35)。

(写真)

4回目の摺りで空の色が摺り込まれた。この後、背景のぼかしや波の色が入る。

塗り絵浮世絵

p.027

人気の浮世絵が、KIJIE オリジナルの大人の塗り絵になりました。山種美術館所蔵の作品見本もご用意。好きな画材、好きな色彩で、あなただけの現代の浮世絵を作ってください。

■ SNS キャンペーン企画

1. インスタグラムにて KIJIE のアカウント @kije_magazine をフォロー
2. 塗り絵作品の写真／動画をハッシュタグ #coloringkije をつけて投稿
3. 抽選で5名様に、山種美術館の浮世絵グッズ(写真)が当たる！応募締め切り 10月31日

※お一人様、何作品でも応募可能です

※応募作品は KIJIE のサイトや SNS に掲載される可能性があります

※ご当選者にはダイレクトメッセージにて、プレゼント送付先住所等をお伺いします

鳥居清長《風俗東之錦 武家の若殿と乳母、侍女二人》

1784年頃 山種美術館

全20図からなる「風俗東之錦」は、江戸の町の華やかな女性風俗を描き出したもので、清長の代表作の一つ。町人に限らず、武家の女性も多く書かれていることが特色。

鈴木春信《柿の実とり》

1767,68年頃 山種美術館

柿をとる美しい娘をおぶるのは、女性と見紛うほど華奢な若衆。鈴木春信による、淡い恋の情景である。足元の飛び石から、庭の中ということがわかる。

歌川広重《東海道五拾三次之内 川崎・六郷渡舟》

1833～36年頃 山種美術館

多摩川を江戸から川崎側へと渡る、六郷の渡し舟。画面右方に遠く富士山を描くことで、画面の奥行き感を高めている。煙草をくゆらす商人、談笑する男女など、舟中の光景はどこかのどか。

エアブラシで描く現代の浮世絵画家

p.031

絵を描くことは子どもの頃から好きだったものの、画家になるという発想はなかったという石川真澄さん。転機となったのは、歌川派の家元・六代目歌川豊国さんの特集したテレビ番組を観たことだった。深い感銘を受けた彼はすぐさま歌川さんを訪ねて作品を見てもらい、弟子入りを許される。しかし、97歳だった師はそのわずか数か月後に他界。石川さんはやむなく独学で浮世絵と向き合うようになる。図書館や古書店でさまざまな浮世絵師の作品集を貪るように見る日々。だが、目にする作品のほとんどは木版画。絵師、彫師、摺師をすべて自分でやるのは難しい。

「自分一人で納得のゆくものを作るため、肉筆で木版画のようなフラットな表現をする方法を模索しました。でも、日本画の画材ではどうしても肉筆っぽさが出てしまうんです」。試行錯誤していたとき、偶然書店で目にしたのが、海外で活躍する画家・寺岡政美さんの作品集。彼の浮世絵はキャンバスに水彩絵の具で描かれていた。「そのとき初めて、出来上がったものがよければ道具や過程は重要じゃないと思ったん

です。それからは、日本画の枠にとらわれずに自分に合った道具を探すようになり、エアブラシに辿り着きました。色ごとに何度もマスキングテープを貼って作る工程は、いくつもの版を使って作る木版画の工程に似ているかもしれません」。

基本は一人で浮世絵を制作する石川さんだが、近年は木版画のプロジェクト参加を依頼される機会が増えた。そんなときは「俺のこの絵が彫れんのか、くらの気持ちで臨む」という。そうでなければ、いい作品はできないと思うからだ。ソフトなルックスとは裏腹に、内面は熱い。そして、そうしたプロジェクトはときに木版画ならではの楽しい発見ももたらす。「バレンで刷った風合いが出たことで、原画よりいいと思うことがあります。そういうときは嬉しいですね」。

大好評を博した KISS や『スター・ウォーズ』とのコラボレーションに続き、現在も、海外のミュージシャンなどとのコラボ木版画プロジェクトが進行中という石川さん。以前から外国人のほうが日本人より浮世絵に対しての認識が高いと思ってきたこともあり、海外へ発信できるのは嬉しいと話す。「ただ、自分としては浮世絵の啓蒙活動をしているつもりはありません。僕の作品をきっかけに浮世絵に関心を持つ人が増えるのはいいことだと思いますが、僕自身は自分の内面を自分の好きな浮世絵の様式で表現しているだけなんです」。

彼の言葉だけを読むと「ストイックなアーティスト」という印象になりそうだが、実際の石川さんはよく笑う楽しい人物でもある。そして、彼には、作品内の漢字の書き手でもある妻・上野谷真奈美さんと、黒猫の梵天という強力なサポーターがいる。1人と1匹に見守られながら、石川真澄でなければ描けない作品を生み出し続けてほしい。

上：石川真澄さんと自画像。「鬱」「病」など夥しい数の漢字は彼の内面を表す。

左上：愛猫コニーの難病治癒を祈って描いたという作品。その甲斐あってコニーは病を克服し、長生きした。

左：エアブラシで制作する作品は、最後に墨で輪郭線を入れて仕上げる。

石川真澄 (いしかわ・ますみ)

1978年東京生まれ。2000年に六代目歌川豊国に師事するも、数か月で師が他界。以後、独学で浮世絵を学び、エアブラシを用いる独自の画法を確立。最近では歌舞伎公演のポスターや10月放送開始のテレビドラマ

『石川五右衛門』のポスターなども手がけた。

題材はロックスターや映画の悪役

p.031

ここ数年、浮世絵木版画の新しい試みとして話題なのが、大物アーティストや映画などとのコラボレーション。そこには伝統技術の継承という目的も込められている。ファンはもちろん、描かれた本人たちにも好評だ。

※販売が終了している場合があります。

●メンバーも気に入った KISS の浮世絵

世界的ロックバンド、KISS がモチーフ。下は歌川国芳の作品をベースに、ポール・スタンレーのメイクシーンを表現。ほかのメンバーは閻魔大王や鬼の姿で着物に描かれている。頭上の文字は代表曲「Rock and Roll All Nite」のサビ部分の和訳。右下はメンバー全員の大首を合わせた構図。メイクの色は実際より薄くして歌舞伎の隈取り風に仕上げている。日本文化好きのメンバーに大好評だったそう。

下：《KISS 浮世絵「浮世粋男接吻四人衆之内宝琉須丹礼」》

右下：《KISS 浮世絵「接吻四人衆大首揃」》

©2015 KISS Catalog, Ltd. Under License to Epic Rights.

©UKIYO-E PROJECT

絵師：石川真澄

彫師：関岡裕介（下）、渡辺和夫（右下）

摺師：伊藤達也（下）、吉田秀男（右下）

サイズ（約）：各縦 48 × 横 34cm 各 22 万円（メンバーのサイン入り）

www.ukiyoeproject.com/kiss_en.html

●日本の大人気特撮テレビ番組から誕生

主人公が巨大ヒーローに変身して怪獣と戦う特撮テレビ番組『ウルトラマン』の放送開始 50 周年記念作品の 1 つ。現在まで続く『ウルトラシリーズ』に登場する怪獣や異星人を妖怪に見立て、『百鬼夜行絵巻』風に仕上げたユニークな作品。大小感を実際の怪獣たちに忠実で、色使いは絵師のセンスが生かされている。ホビーストック社では『ドラゴンボール』など人気アニメを題材にした浮世絵木版画も制作。

《怪獣百鬼夜行》 © 円谷プロ

絵師：冬奇^{ふゆき}

彫師：北村昇一

摺師：市村一房堂^{いちむらいつぼうどう}

サイズ：紙：縦 20 × 横 55cm、絵：縦 16.5 × 横 50cm 4万 5000円

www.hobbystock.co.jp/ukiyo/en

●映画界の金字塔『スター・ウォーズ』の世界を描く

世界的に有名なスペースオペラ『スター・ウォーズ』。左の風景画は雪の惑星ホスの戦闘シーン。実際は青空だが、浮世絵らしく広重の雪景色風にした。「スノースピーダーが出ずビームが一瞬しか映らないので、微妙な色を確認するためにコマ送りで何度も見ました」と石川さん。中はプリンセス・アミダラと人気ロボット R2-D2 をモチーフにした美人画風の作品。「左上はアナキン・スカイウォーカーで、彼がアミダラに贈ったペンダントも一緒に描きました」と石川さん。実際のアミダラではなく、あえて浮世絵美人の全身絵として描かれている。右は主要登場人物の一人、ダース・ベイダーの大首絵。

《浮世絵スター・ウォーズ「星間大戦絵巻 惑星補菓の戦い」》

《浮世絵スター・ウォーズ「星間大戦絵巻 阿弥陀羅姫 R 式 D 式」》

《浮世絵スター・ウォーズ「星間大戦絵巻 暗黒卿 墮悪巢俣茶」》

©&TM Lucasfilm Ltd.

絵師：石川真澄

彫師：渡辺和夫・関岡裕介

摺師：吉田秀男

サイズ（約）：各縦 39 ～ 41 × 横 27.5cm 各 5 万円

ukiyo.cooljapanstores.net

上・右：鳥居清長《風俗東之錦 武家の若殿と乳母、侍女二人》1784 年頃

上・左：喜多川歌麿《青楼七小町 鶴屋内 篠原》1794,95 年頃

中：初摺りが多く、かつて画帖に収められていた際の扉の題字も含む「東海道五拾三次」56 枚が 6 年ぶりに一挙公開。歌川広重《東海道五拾三次之内 岡崎・矢矧之橋》1834 年頃 山種美術館

※いずれも特別展『浮世絵 六大絵師の競演』にて展示

東京都渋谷区広尾 3-12-36

Tel. 03-5777-8600（ハローダイヤル）

10:00～17:00

月曜休館（祝日の場合は翌日）

www.yamatane-museum.jp

●太田記念美術館

実業家・五代太田清藏のコレクションを核とする約 1 万 4000 点を所蔵。月 1 回展示替えされ、9 月 3 日～10 月 30 日は特別展『国芳ヒーローズ』を開催する。

歌川国芳《通俗水滸伝豪傑百八人之耆人 浪裡白跳張順》1828,29 年 個人蔵

特別展『国芳ヒーローズ』後期にて展示

東京都渋谷区神宮前 1-10-10

Tel. 03-3403-0880

10:30～17:30

月曜休館（祝日の場合は翌日）。展示替え期間、年末年始休みあり

www.ukiyo-ota-muse.jp

●すみだ北斎美術館

2016 年 11 月 22 日、墨田区の郷土作家、葛飾北斎の美術館が開館する。世界有数の北斎作品収集家ピーター・モースと、浮世絵研究者・榎崎宗重のコレクション、墨田区の収集品からなる北斎とその門人の版画、肉筆画、版木など約 1500 点を所蔵。設計は、世界的な建築家・妹島和世率いる妹島和世建築設計事務所。貴重な作品の保存と展示を行いながら、街に開かれた美術館を目指している。北斎が生まれた地、現在の墨田区亀沢付近に立地する。

葛飾北斎《隅田川両岸景色図巻》肉筆画 1805 年（部分）

約 100 年ぶりに発見されたコレクションの核の一つとなる作品。開館記念展『北斎の帰還—隅田川両岸景色図巻と名品展（仮）』で展示予定。

お気に入りの浮世絵に出合える美術館ガイド

p.034

粒揃いの浮世絵コレクションを有する美術館で、絵師の個性が表れた線や色彩を間近に鑑賞しよう。

●山種美術館

今年、開館 50 周年となる日本画専門美術館。9 月 29 日まで、秘蔵の浮世絵コレクション約 90 点の全貌を紹介する特別展『浮世絵 六大絵師の競演—春信・清長・歌麿・写楽・北斎・広重—』を開催中。

東京都墨田区亀沢 2-7-2
Tel. 03-6658-8931
※開館時間、観覧料など詳細は未定

●千葉市美術館

浮世絵の歴史がたどれる約 3000 点のコレクションを所蔵。9 月 7 日～10 月 30 日開催の『岡崎和郎』展や『小川信治』展では、現代美術とともに所蔵浮世絵も展示する。

鈴木春信《鞠と男女》1767 年
『小川信治』展にて展示

千葉市中央区中央 3-10-8
Tel. 043-221-2311
10:00～18:00 (金曜・土曜～20:00)
毎月第 1 月曜休館 (祝日の場合は翌日)
www.ccma-net.jp

●山口県立萩美術館・浦上記念館

浦上敏朗コレクションを核とし、浮世絵版画は約 5300 点を所蔵。9 月 10 日～10 月 16 日は特別展示『やきものでわくわく浮世絵にうきうき開館 20 周年特別企画展 I 東洋陶磁と浮世絵一館蔵名品選』。

喜多川歌麿《難波屋おきた》1793 年頃
『やきものでわくわく浮世絵にうきうき』にて展示

山口県萩市平安古町 586-1
Tel. 0838-24-2400
9:00～17:00
月曜休館 (祝日の場合は翌日)
www.hum.pref.yamaguchi.lg.jp

●東京国立博物館

日本最古かつ最大級の博物館。浮世絵は松方コレクションをはじめ約 1 万 2000 点を所蔵する。本館 10 室にて、展示替えしながら江戸の衣装などとあわせて紹介する。

喜多川歌麿《婦人相學十躰・浮気の相》18 世紀 重要文化財
8 月 30 日～9 月 25 日展示

東京都台東区上野公園 13-9
Tel. 03-5777-8600 (ハローダイヤル)
9:30～17:00
月曜休館 (祝日の場合は翌日)
www.tnm.jp

●江戸東京博物館

書籍や染織資料との組み合わせによるテーマ解説など江戸の歴史・生活・風俗・文化の紹介の中で浮世絵が理解できる。季節のテーマ展示もある。

歌川豊国《助六所縁江戸桜 七世市川団十郎の助六》1811 年

東京都墨田区横網 1-4-1
Tel. 03-3626-9974
9:30～17:30 (土曜～19:30)
月曜休館 (祝日の場合は翌日)
www.edo-tokyo-museum.or.jp

●岡田美術館

名誉館長・岡田和生による東洋の古代から現代までの所蔵品を紹介する広大な美術館。浮世絵コレクションでは肉筆画も多い。

葛飾北斎《雁図》1847 年
9 月 3 日より展示

神奈川県足柄下郡箱根町小涌谷 493-1
Tel. 0460-87-3931
9:00～17:00
12 月 31 日、1 月 1 日、展示替え期間休館 (会期中は無休)
www.okada-museum.com

英語で学べる本物の木版画体験

p.035

英国生まれのカナダ人木版画家、デービッド・ブルさんが経営する「木版館」は、体験スペースとショップ、工房からなり、最大の目的は日本の木版画の美しさを伝えること。「みなさ

ん木版画は高価で手が届かないと思っていますが、江戸時代は大衆のものでした。ぜひこへ来て、見て触れて楽しんでください」とデービッドさん。畳の部屋で行われる摺り体験では、赤、青、黄、黒の4色の版を順番に重ねていく。完成時の感動を損ねないよう、あえて見本は置いていないのが心憎い。完成した作品は斜め上から光を当てると、木版画ならではの凹凸が浮かび上がる。その繊細な美しさには誰もが歓声を上げる。

上：木版画体験“print party”は約1時間で1人2000円(家族、グループ割引あり)。木版画の彫師・摺師として日本で30年以上活動が続けるデービッド・ブルさんの代表作は、ジェド・ヘンリーさんと共同制作しているオリジナル木版画「浮世絵ヒーローズ」。

中左：神社仏閣を参拝した記念に納める千社札の伝統的なレイアウトに、現代の絵柄を組み合わせた作品。3枚セットで3500円。

中右：ビルの2階に掲げられた看板は木版画を摺るときに使うバレン型。

MOKUHANKAN

東京都台東区浅草 1-41-8

Tel. 070-5011-1418

10:00 ~ 17:30

火曜休館

mokuhankan.com/parties